

記載の楽器編成は楽譜上のものであり、実際の演奏時には異なる場合があります。何卒ご了承ください。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770 ~ 1827)

ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

1792年、当時のヨーロッパ音楽界の重鎮の1人だったヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)のもとで学ぶべく、20代前半のベートーヴェンは故郷のボンを後に、ウィーンへと移住する。それからほどなくしてスケッチが書かれ始めたのが、当作品だ。

若き日のベートーヴェンは、ピアノ(正確に書くと、当時は現在のようなピアノの形へ発展途上の段階にあったクラヴィア)をはじめとする鍵盤楽器の名手として知られていた。またそうした事情ゆえ、ボンにいた頃からピアノ協奏曲を作っており、当ピアノ協奏曲はこのジャンルの最初の作品ではない。ただし、最初に出版されたという経緯から、『ピアノ協奏曲第1番』のナンバーリングが与えられた。さらに初演後、ベートーヴェンは彼の多くの作品同様この協奏曲にも入念な改訂作業を施した上で、出版をおこなっている。

ベートーヴェンが移住した当時のウィーンは、ヨーロッパに冠たる帝国を築いていたハプスブルク家の都として、世に名だたる国際都市だった。またそうした事情から、様々な刺激に慣れっこなっているウィーンの聴衆の度肝を抜くとともに、自らの芸術的野心を遺憾なく発揮しうるようなピアノ協奏曲の創作に、ベートーヴェンは燃えていた。

たしかに全体の構成は、18世紀古典派のピアノ協奏曲の例に漏れず「急・緩・急」の三楽章形式となっており、内容的にもハイドンをはじめとする古典派の端正な響きが満ちているかもしれない。ただし、至る所に革新的な仕掛けが施されているのもたしかである。

たとえば**第1楽章**はハ長調を基本とする一方で、中間部は破格ともいえる変ホ長調で書かれている。独奏者の裁量に任せられることが多かったカデンツァも、未完も含め3曲がベートーヴェン自身によって残されており、作曲家自身の意志を隅々まで徹底させようという意図がうかがえる。ゆったりとした**第2楽章**で、ピアノ独奏が多彩な音階進行を奏でる点も聞き逃さない。

さらに、オーケストラが単なる伴奏ではなく、独奏ピアノにひけをとらない存在感を発揮しているのが特徴で、特にそれは**第3楽章**に顕著に現れている。さらに楽章の最後、静かに終わると見せかけて、急速な盛り上がりが出現するのも、それまでの協奏曲にはほぼ見られなかった野心的な試みだ。

小宮正安 TEXT by Masayasu Komiya

作曲:1793~1800年

初演:1795年3月29日、ウィーンのブルク劇場、サリエリ指揮、作曲家自身の独奏

編成:独奏ピアノ、フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

9/14 SAT. 15 SUN.

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770 ~ 1827)

カンタータ「静かな海と楽しい航海」 作品112

1814年2月に『交響曲第8番』を初演して以来、1824年に『交響曲第9番』を初演するまで、交響曲はもとより、管弦楽曲自体をほとんど書かなくなってしまったベートーヴェン。この「オーケストラ泣かせ」とも言える時期に作られた、管弦楽と合唱のための作品こそカンタータ『静かな海と楽しい航海』である。

テキストは、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749~1832) が1796年に発表した、2作1組の詩によるもの。第1部の「静かな海 Meeresstille」は直訳すれば「凪」のことで、霧に包まれた恐るべき停滞感の中、嵐とは異なる状況下での死の危険が歌われる。続いて第2部「楽しい航海 Glückliche Fahrt」(これも直訳すれば「幸運な航海」)に入ると、霧が消えて風が吹き始め、陸地がいよいよ見えてくる。旅の風景を歌いながら、そこにゲーテならではの人生観や社会観が反映された内容だ。

ベートーヴェンは1810年、ゲーテの戯曲『エグモント』のウィーン上演に際して、序曲を含む幾つかの曲を書いている他、1812年にはゲーテ自身との邂逅を果たしている。そうした中で、彼が再びゲーテの作品に取り組み、最終的に当作品をゲーテに献呈したのも不思議ではない。しかも作曲時期は、ウィーンをはじめヨーロッパを侵略し続けたナポレオン・ボナパルト (1769~1821) の脅威が去り、ナポレオン後のヨーロッパのあり方を決める国際会議=ウィーン会議が開かれていた時期。文字通り死の恐怖が去り、国際会議でウィーンが活気づいていた中で生まれた1曲である。

曲そのものは、ゲーテの詩の内容を忠実になぞったもの。「静かな海」では、張り詰めた静けさが支配する中、「不気味な Ungeheuern」の部分では、凪の恐怖に耐えかねた叫びが一瞬爆発する。やがて「楽しい航海」の前奏部分に入ると、音階が上昇を繰り返す中でテンポが速まり、風が吹き始めた様が描写される。「急げ Geschwinde!」という言葉が、文字通り早口言葉のように繰り返され、音楽はひたすら高揚を遂げてゆく。

文学的な詩を基に、管弦楽と合唱の融合を目指した点において、やがて生まれる『交響曲第9番』の先駆けとも言える作品である。

小宮正安 TEXT by Masayasu Komiya

作曲: 1814 ~ 1815年

初演: 1815年12月25日 ウィーン レドゥーテン・ザール 市民病院基金のための慈善演奏会にて、作曲家自身の指揮

編成: 混声合唱、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部

9/14 SAT. 15 SUN.

ヨハネス・ブラームス (1833 ~ 1897)

交響曲 第3番 へ長調 作品90

1883年、ブラームスは旅先で50歳の誕生日を迎え、一連の演奏活動に区切りをつけて、ライン川を臨むリュードスハイムに住むベッケラート家に立ち寄り、この年の夏をリュードスハイムの近くの美しい保養地、ヴィースバーデンで過ごす。ここでの休暇期間に作曲されたのが《交響曲第3番》である。この年の10月初旬、ドヴォルザークがブラームスを訪問する。ドヴォルザークはジムロックへの手紙の中で、上機嫌のブラームスについて語っており、この折、彼はブラームスに新作の交響曲の演奏を所望し、その求めに応じてブラームスは第3番の第1楽章と第4楽章をピアノで演奏して聴かせる。そしてこの交響曲は1883年12月2日、ウィーンで初演された。

交響曲第3番は全4曲の交響曲の中でもっとも統一性が意図的に図られている作品である。第1楽章の主題が、第4楽章の最後に回帰し、主題の循環が用いられているだけではなく、主題の使用だけではなく和声や調の使い方についてもこの作品は構成的である。この作品の第1楽章の主題はシューマンの《交響曲第3番》第1楽章との関連性が注目されているほか、ヴァーグナーの《タンホイザー》との結びつきも指摘されている。この作品の作曲・完成の年にヴァーグナーが世を去っており、彼は妻コジマに弔意を表している。

第1楽章 (アレグロ・コン・ブリオ へ長調、4分の6拍子) ではへ長調の下行動機と、へ短調の上行動機が同時に用いられる。

第2楽章 (アンダンテ へ長調、4分の4拍子) は牧歌的な楽想でクラリネットの奏する主題をヴィオラが優しく受ける。

第3楽章 (ポーコ・アレグレット ハ短調、8分の3拍子) は深いメランコリーに彩られた感動的な楽章。

第4楽章 (アレグロ へ短調-へ長調、2分の2拍子) は押し殺したような弦楽器のユニゾンで開始し、やがて明るいへ長調に転じ、最後は第1楽章の主題が静かに回想されて作品を締めくくる。

西原稔 TEXT by Minoru Nishihara

作曲: 1883年

初演: 1883年12月2日 ウィーン、ハンス・リヒター指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

編成: フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部